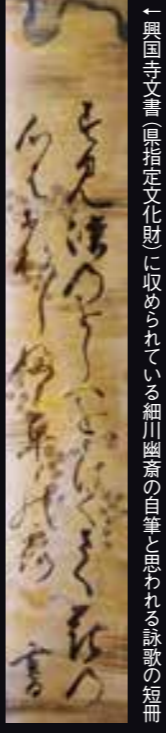


# 細川幽齋

## 墨染めの花見

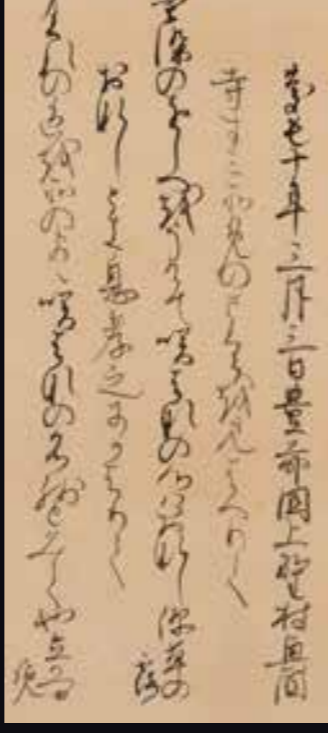
「古今和歌集」の奥義を秘伝する「古今伝授」の唯一の継承者であった細川幽齋。かつて足利家に仕え、将軍のブレインとしても活躍しました。その当代随一の文化人が、足利尊氏ゆかりの桜と向き合います。



「興国寺文書(県指定文化財)」に収められている細川幽齋の自筆と思われる詠歌の短冊

すみ染のをしへをうけてさく花の

心はおなし ふか草の露 玄旨



【しゅうみょうしゅう】  
**衆妙集(抜粋)**  
細川幽齋の和歌集。歌数は約680首。慶長10年3月3日に細川幽齋が豊前国上野村興国寺の「墨染の桜」を見て詠んだ歌と息子・細川孝之にかわって幽齋が詠んだ歌「夕ぐれの色をそのまゝ咲はなの名残とみてや立かへる覧」が記されている。  
(「衆妙集」二三四、二三五 / 永青文庫所蔵)

「墨染の教へを受けて咲く花の心は同じ深草の露」。「筆運びから見て幽齋自筆の短冊」と読み解く熊本大学の竹島准教授は「墨染の教え(仏の教え)を受けて咲く花の心は『墨染に咲け』と言われたあの京都の深草に咲く花の心と同じ。ここの深草にも涙のような露が置いている」と歌の意味を解説します。

当代随一の文化人、細川幽齋。その教養を駆使して時代の荒波を超えてきた幽齋が、在任の京都からこの地を訪れ、晩年に残した貴重な詠歌です。

足利将軍の側近を経て、信長・秀吉・家康と3人の天下人のもとで乱世を生き抜いた細川幽齋。あらゆる学問や芸能の奥義を極めた当時ナンバーワンの文化人でした。

特に和歌は、その奥義を伝える「古今伝授」の唯一の継承者であり、戦国時代に大きな足跡を残した日本の政治・文化史上の鍵となる人物です。

その細川幽齋が上野の興国寺を訪れ、足利尊氏ゆかりの「墨染の桜」と向き合いました。時は慶長10年(1605)旧暦の3月3日(現在の4月20日)。関ヶ原の戦功で息子の細川忠興が豊前小倉藩主として入国した5年後、細川幽齋が72歳で迎えた春でした。細川家に残されている和歌集「衆妙集」に、幽齋の四男で香春岳城主の細川孝之(21歳)を伴い花見をしたことが記されています。



【ほそかわ ゆうさい / ほそかわ ふじたか】

## 細川 幽齋(藤孝) [1534-1610]

戦国時代から江戸初期の武将・大名。あらゆる学問・芸能の奥義を極め、当代随一の文化人・歌人として有名。号は幽齋、法名は玄旨。室町幕府・足利将軍家に仕え、15代将軍・足利義昭の擁立に尽力。激動の時代を抜群の才能と政治的感覚でぐり抜け、近世細川家の祖となった。  
(細川藤孝画像 / 東京大学史料編纂所蔵模写)

## 古今伝授の太刀

【国宝 太刀 銘 豊後国行平作】  
細川家に伝わる国宝。関ヶ原の戦で徳川方に属した細川幽齋は、丹後田辺城で46日にわたり西軍を引きつけて籠城する。その際、石田方の兵が城を取り囲むなか、幽齋から古今伝授の奥義を受けた烏丸光広に贈られた名刀。(永青文庫所蔵)

## 古今伝授の間

水前寺成趣園(熊本市)の池のほとりにある茅葺の建物は、かつて京都御所内にあったもので、細川幽齋が八条宮智仁親王(後陽成天皇の弟)に古今伝授をした建物。大正元年に京都から移築され、この建物から見る風景が水前寺公園内で最も美しいと言われている。  
(古今伝授の間 / 熊本県指定重要文化財)



## 古今伝授の心を垣間見る幽齋の詠歌



熊本大学大学院 准教授 竹島 一希さん

当代一の文化人であった細川幽齋。特に古今伝授の継承者として教養ある和歌を残しています。興国寺での幽齋の歌は、深草の山に埋葬された藤原基経を悼んだ古今和歌集の歌「深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりは墨染に咲け」(深草の野辺に咲く桜よ、心を持っているならば今年だけは墨染色に咲いてくれ)を本歌とします。幽齋も誰かを追悼したのかもしれませんが、この歌の作者が、上野岑雄に当地の上野も意識したのでしよう。心の持ち様や人としての生き方も説いた古今伝授。仏教心を持つ「墨染の桜」にそれを見ると、興国寺をたたえています。